湯浅八郎と二十世紀（三）

武田　清子

1．日米関係の明暗

〔1〕 太平洋戦争までのアメリカ生活

1938年－39年、インドのタンバラムで開催されたマドラス会議に出席した後、湯浅八郎は上述のように、A・A諸国のキリスト者として、その会議のメッセージをアメリカ諸教会に伝えるために、アメリカ組合教会伝道部（アメリカン・ボード）の招きにより渡米した。案内役は同伝道部教育部長のルース・シーベリー女史であった。湯浅の渡米は6ヶ月の予定であったが、真珠湾攻撃に発する日米戦争（太平洋戦争）により8年間の滞米となった。

彼は、マドラス会議報告の旅を通してシーベリーさんとは非常に深い尊敬の念をもって親しく交わる友人となった。湯浅のアメリカ滞在中の保護者ともいうべき役割をボストンのシーベリー家の人々（ルースの母、妹も共に）が積極的に担って下さった。ルースは八郎を「兄さん」と呼んでいた。

湯浅はアメリカの教会、YMCA、その他多くの会合で講演をたのまれ、彼の話は好評であった。ある時には、私が日米交換学生として学んでいたミシガン州のオリヴェット大学（神戸女学院の姉妹校で、アメリカ中部では、リベラル・アーツの教育、そしてオックスフォード大学の「チュートリアル・システム」を採用する大学としてその特色が認められていた）に1学期間、客員教授として招かれ、「日本文化」についての講義をしたことがある。日本の大学生が、デカルト、カント、ショーペンハウエルをもじって、デカンショ節の歌を唱うこと、また石の文化、石を水で濡らしてその美しさをめでる美意識などにもふれながら、「同志社事件」をめぐるイデオロギー状況や政治問題などをも語った

が、湯浅特有のユーモアまじりの講義はアメリカの大学生、教授たちに好評であった。大きなオーク・ツリー（かしの木）の林を通りぬけるとリンゴの花が美しく咲くキャンパスを歩いて、ドイツから亡命してきた音楽好きの哲学教授の小さなお家に夕食に御一緒に招かれたこともあった。同志社事件の緊張から解き放たれた自由なアメリカ生活をのびのびとエンジョイしておられる様子であった。

あるイースター休暇には、私は、先生がお客様として泊まっておられるボストンのシーベリー家に招かれたことがある。グレイハウンドのバス旅行でミシガンからボストンまでの独り旅であった。シーベリー家に迎えられ、歓待された。湯浅教授がこのお宅でいかに尊敬と親愛をもって大切に扱われておられるかがよく感じとれたのであり、楽しい数日をすごさせていただいた。イースターには皆でそろって教会に出席した。

かえりには首都ワシントンD.C.を訪ねるのがよいとの皆様の御意見で決まった。湯浅先生は堀内謙介大使御夫妻に手紙を書いてくださった。ことに大使夫人には神戸女学院のあなたの後輩だからよろしくと書いてくださったようである。そのおかげでワシントンでは堀内夫人が大変御親切にもてなしてくださった。

オリヴェット大学卒業後、私は、ニューヨークにゆきコロンビア大学、及び、ユニオン神学校（大学院）で学ぶこととなった。この頃、キリスト教界に大きな影響力を持っていたラインホールド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) 教授のもとで学びたいというのが、私の最も深いねがいであった。オリヴェット大学での私の主任教授がニーバー及び、P・ティリッヒ (Paul Tillich) 両教授の高弟だったことから、是非ニーバー教授のもとへ送りたいとの御配慮によって、ニューヨーク行きが決まった。そして、ニーバー教授は特別な関心をもって指導して下さり、御自宅での学生の集いにもいつも招いていただいた。あの頃はニーバーの絶頂期でもあった。キリスト教倫理学の講義などには、学生だけでなく牧師、神学者、その他、諸大学の学者たちも多数聴講に来ていて大きな教室はいっぱ

いであった。

こうした楽しい研究生活の中、1941年12月 7 日（アメリカ時間）、日曜日であったが、日本軍による突然の真珠湾攻撃によって日米戦争が始まったのである。ニューヨークのインタナショナル・ハウス（私の宿舎）で友人よりそれを知らされたのであった。

湯浅八郎は、アメリカの一番北のメイン州の片田舎の教会で、その日の朝、「キリスト者の平和責任」と題して説教をしていた。その最中に真珠湾攻撃の放送を知らされたという。一瞬にして敵国人になったことにより旅行の自由は認められなくなった。しかし、シーベリー家の人々が保証人となり、無事に守られていたのであるが、戦時下、何か自分の出来ることをしなければとの思いが強く、ボストンからニューヨークに籍を移す申請をし、1942年 5 月許可が出てニューヨークに移った。

当時、ニューヨークではアメリカに来て働いていた日本人は相当数いたが、戦争が始まると皆解雇された。タクシー運転手、クリーニング屋、女中等であったが、英語も話せず、相談する人もなく困窮をきわめていた。

そこで、日本からアメリカに帰っていた宣教師たちが中心になって、ニューヨークに日本人保護委員会をつくった。メソジスト教会のアイグルハート博士の夫人がその委員長となり、キリスト教各教派の指導者たちもそれに協力した。湯浅は、まず、その事務所に毎日行って、そこに持ちこまれてくる在留日本人の問題の解決にあたった。その頃、これは、湯浅が強調して語ったことであるが、当時のニューヨーク市長フィヨリロ・H・ラガーディア (Fiorello Henry Lagurdia) が、戦争がはじまると、直ちに放送を通して、アメリカ市民、ことにニューヨーク市民に訴えた。アメリカに来ている日本人は決してこの戦争の責任者ではない、むしろ被害者なのだから、この人たちに対して迫害を加えてはならない。失業している日本人は、ニューヨーク市が市の施設を開放して衣食住を保護するから申し出るようにと言った。そして、市の倉庫を開放して、そこに来さえすれば、ベッドと 1 日 3 度の食事が得られるよう方針を立てて保護

してくれた。こうした市長の配慮に湯浅は深く心をうたれたのであった。

この頃、日本人の男子学生は、他の日本人と共にエリス島に収容されたが、女子学生（それも２、３人）はそのまま学業をつづけることが出来た。開戦直後は、外出しないよう注意され、学生寮である国際文化会館 (International House) に宿泊していた。学友たちが講義のノートを持ってきてくれた。近くに下宿していた鶴見和子さんもインタナショナル・ハウスの方が安全だろうとお誘いし、当局者にたのんで部屋を確保してもらい、移って来られ、安心した。そして、日がたつと大学にも無事通うことが出来た。ラインホールド・ニーバー教授は、自ら保証人になるからといって下さった。家族からの送金ができなくなり、奨学金の外、諸経費のためもあって、学生食堂の皿洗いなどのアルバイトをしながら勉学を続けた。

そういうところへ日本政府から日米交換船が用意されたから帰国するようにとの電報を受け取った。教授も学友たちも勉学をつづけることをすすめて下さったのであるが、私は帰国を決心した。周囲の御好意により留学を続けることは可能であったが、戦争中、敵国人としてお世話になることへのためらいもあり、また、日本は必ずこの戦争で敗けるだろうと推測できた。母国が灰になるとも、その経験を日本の人々と共に負わねば日本人としての資格がなくなるというような考えが強かった。それは、青年時代の私にとって、愛国心というよりも、日本人としてのアイデンティティを堅持すべきだというような気持だったように思う。

他方、湯浅八郎は「僕は日本に帰らずにアメリカにとどまって出来ることをする」といわれた。右翼・軍国主義者の支配する日本での生活には戻りたくないというお気持もあったであろう。また、戦争が終わった後、平和のために働くことも出来るのではないかとのねがいもあられたと思う。しかし、日本に残された御家族（清子夫人と病身で入院中の長男 洋（よう））への心かかりが深く、特に清子夫人が日常の生活物資に不自由していると思えるので、持てるだけ持って帰って届けてほしいと言われた。シーツやタオルその他が貧乏学生のトランク

（スーツ・ケース）の中身の大半を占めた。書物はアメリカ当局にとり上げられてしまったのでそれが出来た。短いおことづけの言葉と共に、それらをお預かりして帰国した。ニューヨークを発つ時は、日米交換船（グリップスホルム，Swedish boat）での帰国者の集合場所であったペンシルヴァニア・ホテルまで湯浅先生は来て下さった。そして、上ってゆくエレベーターに乗り込むのを見送って下さり、お別れした。

1941年 6 月18日、ニューヨーク発、野村大使、来栖大使ら外交官らと共に大西洋を南下、アフリカ南端の喜望峰をめぐり、ポルトガル領だったモザンビークのロレンソマルケスで日本から送還されてくるグルー大使、宣教師らと交換、7 月26日、浅間丸で出発、南十字星をみながらの長い船旅であった。

横浜に交換船が着いた時（1942年 8 月20日）、清子夫人は「湯浅は帰って来なかった？」といわれ、あのしっかりした婦人がハラハラと涙を流された。短いおことづけの言葉とお預かりした物をお届けした。湯浅夫人は当時、御生活のためもあったかと思われるが、草月流の生花を習い、師範の資格をとり、生花を教えておられた。YWCAの役員や幹事たちがこぞってお弟子になっていた。私もしばらく清子夫人のお弟子のグループに入って生花を習った（華道は旧家の習慣として、お琴などと同様、子ども時代から別の流派で習っていたのであるが)。洋さんは入院中のようであった。

他方、戦時下の湯浅八郎の活動につき、強制収容所に入れられた日本人移民への活動はあとでふれることとして、ここに書きとどめて置きたいことは、この戦争で日本は必ず負けると考えていたアメリカのキリスト者たちが、戦後復興のための平和研究会を始めていたことである。湯浅もこの研究会に出席したのであるが、ここでダレス (John Foster Dulles) が発言したことに感銘を受けたということを幾度か湯浅教授よりうかがった。第一次世界大戦後、講和会議がパリで開催された時、ダレスはウッドロー・ウィルソン (Woodraw T. Wilson, 1836-1924) 米大統領の若い助手であった。ダレスは長老派教会の牧師の息子で国際法の専門家としてウィルソンに随行していたのである。この会議で勝ち誇ったヨー

ロッパ諸国が、自国に有利な一方的条約を締結するのを見て、これは次の戦争の原因をつくるものとなるのではないかと心を痛めた。第二次世界大戦後の平和条約は、この誤りを繰り返してはならないとダレスは言った。日本やドイツに対して第二次世界大戦後、どのような講和条約を結び、将来の世界平和のための基礎をつくるか、その方法を今から用意することが重要だというダレスの発言に深い感銘を受けたという（ダレスはサンフランシスコで開催された第二次世界大戦後の講和条約締結会議の時にはアメリカ国務長官であった)。日本ではダレスに対して戦後いろいろと批判もあった。しかし、戦争中のアメリカにあって、戦後の平和を希求するダレスのこの言葉に感銘を受けた湯浅のダレスへの尊敬は不変であったように見受けた。

〔2〕 強制収容所の日系移民 ── 未来へのメッセージ ──

日本軍による真珠湾攻撃によって太平洋戦争が勃発した。アメリカ当局は、太平洋岸に住んでいた日系移民 ── 国籍のない者も、アメリカで生まれた二世として、アメリカ市民権を持つ者も区別なく、病人も赤ん坊も、すべての日系人を集めて強制収容所に入れ、疎開させる政策を断行した。これは、まさに日米関係の「闇」の部分であった。

これら日系人は、国家の安全保障に脅威になるとの理由によって、フランクリン・ルーズヴェルト大統領は大統領行政命令9066号に署名し、陸軍省に地域を限定して日系移民の強制収容を命じたのである。ことに、日系移民は、スパイあるいは、日本軍がアメリカ本土を侵攻する場合、手引きをするのではないかなどといった戦時下のヒステリー心理のもとに、即刻、隔離されることとなったわけである。つまり、「敵性外国人」として12万313名の日系人（その70％はアメリカ生まれの二世で米市民権をもっていた）が、全米11ヶ所の収容所に強制的に収容された。同じ枢軸国であったにもかかわらず、西洋人であるドイツ人、イタリア人はこのような取扱いは受けていない。これら日系移民は営営として築いてきた財産を一瞬にして失い、鉄条網を張りめぐらされた砂漠地帯

に急造されたバラックの収容所に3年間閉じこめられたのである。この収容所については新聞、ラジオなどで報道されてきており、映画もつくられ、いろいろの面で記録もされ、広く知られていることであるから詳述は除く。しかし収容所の所在地は次の通りである。

収容所の所在地

地　名	英語名	州	開設日	閉鎖日
ツールレイク	Tule Lake	カルフォルニア	1942年5月27日	1946年3月20日
ポストン	Poston	アリゾナ	1942年5月8日	1945年11月8日
マンザナー	Manzanar	カルフォルニア	1942年6月1日	1945年11月21日
ヒラ・リバー	Gila River	アリゾナ	1942年7月20日	1945年9月28日
ミニドカ	Minidoka	アイダホ	1942年8月10日	1945年10月28日
ハート・マウンテン	Heart Mountain	ワイオミング	1942年8月12日	1945年11月10日
アマチ	Amache	コロラド	1942年8月27日	1945年10月31日
トパーズ	Topaz	ユタ	1942年9月11日	1945年10月31日
ローワー	Rohwer	アーカンソー	1942年9月18日	1945年11月30日
ジェローム	Jerome	アーカンソー	1942年10月6日	1944年6月30日
クリスタル・シティ	Crystal City	テキサス	1942年11月	1947年12月

（「日系アメリカ人強制収容所の概要」全米日本人博物館資料による）

これら11ヶ所の収容所のうち、上から10ヶ所は戦時転住局が管理していたが、11番目のクリスタル・シティは司法省の管轄下にあり、約3000人の日系アメリカ人が抑留されていた。これら強制立ち退きを命ぜられた日系アメリカ人は1942年3月より、16ヵ所（内14ヵ所はカリフォルニア州）に設けられた集会センターにまず拘留され、順次、強制収容所に移された。現在アメリカ・ロサンゼルスの中心部に位置する日本人街、リトルトーキョーに全米日系人博物館がつくられている。ワイオミング州に当時のまま残っていた収容所が移築されたとのことである。

話を湯浅八郎に戻すが、この強制収容事件は、当時の西部防衛司令官の考え

に基いて行われたことであって、アメリカの歴史に残る最も暗い一頁(ページ)だ。アメリカ市民の人権蹂躙(じゅうりん)、憲法の保証を無視した恥ずべき事件だと湯浅は言っている（当時、日本では、より非人道的な取扱いがコリヤンや中国人に対して行われていたことは、戦後広く知られるところとなっている。抗議の裁判もコリヤンや中国人によって起されている。しかし、当時は抗議どころか口に出すことも出来なかった日本の実態をも想起すべきことではある）。

しかし、自由の国、アメリカでは起こってはならないことだと湯浅は考えた。この強制収容所の処置が行われて 1 ヶ月もたたないうちに、ジョン・フリン（John T. Flynn）という一共和党員がこれは「アメリカの歴史における最も暗い 1 ページ」（“The darkest page in the history of the United States of America”）と内部からのアメリカ批判を発表したことを湯浅は紹介し、こういう国政批判が許されるのがアメリカの本当の姿だと語っている。

戦争中、アメリカの教会、キリスト教の指導者たちが主催して収容所の人々を慰問する旅をはじめた。そのグループに同行、あるいは単独で湯浅は、幾つものキャンプを訪問した。このように無一物になって強制的に収容されて、不自由な生活を強いられた日系人は、「もうアメリカを信頼することは出来ない。戦争がすみ次第、日本に帰るんだ」という人たちもいた。それらの人たちに対して、湯浅は、そのような考えを持ってはいけない。アメリカはあなた方の母国だ、あなた方はアメリカの市民なのだ。このような間違いをおかしたのがアメリカであるなら、あなた方の母国であるアメリカをよくするのがあなた方の責任だ。アメリカを見限って日本に帰るなんていうのはとんでもない考え違いだ —— と力説した。

敵国となったアメリカに、敵国人として滞在していながら、アメリカに忠誠をつくせ、よりよい国にする責任があなた方にはあるのだなどと説いたので、「勝ち組」とよばれていた日本の勝利を信じていたある日系人たちからは、「湯浅国賊野郎」と恨まれて、ユタ州のあるキャンプでは袋叩きにあいそうなこともあったとのことである。湯浅の考えを支持する人々は、小さな小屋に湯浅を

入れて幾人かで夜通し見はりをして彼を護り、翌早朝、彼を汽車に乗せて脱出させてくれたということもあったようである。

しかし、ここで私が興味深く思うのは、日本から移民として苦労して働いていた異民族の元日本人たちに、アメリカ市民としてアメリカという国に根をおろすことへの湯浅の楽観的・積極的な考え方である。戦争は永久に続くものではない、やがて平和が来ることを忘れてはいけないということ、そして、アメリカは必ず反省するだろう。あなた方は移民としてこの国に移住し、この国の市民になったのだから、ここがあなたたちの国なのだ。日系市民が立派なアメリカ人としてこの国をよくするために働くことが大切なのだと彼は説いてまわったのである。戦後、日系市民の中から幾人かの上院議員も出ている。あと50年もすると日系市民の中から大統領候補が出てくるかもしれないと湯浅は考え、また、語ったのであり、こうした湯浅八郎の中には、少年としてカンザス大学で学んだ時以来、彼のいだいていたオプティミスティックなアメリカ観が根底にあったともいえる。しかし、いろいろの移民によってつくられてゆくアメリカという国、そして憲法の保証を重視する国への信頼が湯浅には根強くあったことが考えられる。やがて、ヨーロッパ戦線で活躍して有名になった日系人部隊442部隊の勇敢さもアメリカ人の心をうった。日系人の若者たちが母国アメリカに対して忠誠心をもっていることを生命をかけて示すという、いたましさはぬぐえないが、一つの異民族がアメリカに土着し、市民権を獲得すると共に、市民として責任を果すための涙ぐましい努力が続くこととなったのである。

戦後、強制収容の過ちへの謝罪と補償を求める法案が1983年に米議会に提出され、2回の審議未了・廃案を経た後、1988年4月、戦時下、市民強制収容への米議会の公式謝罪、および生存している6万人に対して1人2万ドルの補償金を出すことが、1988年、上下両院で決定するに到った。両院は「人種偏見、戦時ヒステリー、政治指導者たちの怠慢を批判」し、「国民を代表して議会は謝罪する」と法案第1章に明記した。1988年8月、レーガン大統領が署名し、公式に決定されたのである。

その背景には、イノウエ議員によって「国家の安全の名のもとに国民が他の自国民に対して憲法上の諸権利を奪う過ちを二度と繰り返してはならない」というような訴えがなされたこと、さらに、米議会がつくった「日系人の戦時収容に関する委員会」の働きもあった。全米20ヵ所で、2年間、750人の証言をきく公聴会も開かれた。このようにして、過去を徹底的に調査し、過ちの事実を米国議会として認め、謝罪すると共に未来への教訓を導き出したという、アメリカにとっての歴史的出来ごとであった。

日系移民に対する強制収容所問題が少し長くなったが、戦争中、アメリカにとどまった湯浅八郎は、アメリカは、必ず変ると確信していたのであり、その確信に基づいて、日系移民に対してアメリカ市民としての権利を守ること、およびその責任を果すことの大切さを力説してまわったことは、こうした長年にわたるアメリカ憲法の精神を守るたたかいへと日系人たちをふるいたたせる一つの重要な要因となったと考えられる。

さらに、湯浅八郎の日系移民へのアメリカ市民としての権利と責任を説いた励ましは、単に「アメリカという国」と「日本人移民」との関係にとどまらず、現在、世界全体にわたって難民、移住民が激増しているこの現実に対しても、間接的ながら、重要な示唆、メッセージを含んでいると思える。異なる文化、異国民の国に定住しなくてはならなくなった移民（難民）の数は増大しつつある。20世紀から21世紀にかけて世界は諸々の紛争による人口の大移動の問題をかかえる時代である。こうした移住民、難民は援助を受けなければならない。援助を受ける受け身のひけめ、遠慮、よそ者的疎外感を持たざるを得ないことは、避けられない現実である。しかし、母国の混乱が治まり自国の再建につくす道が開かれず、異国に定住しなくてはならなくなった場合、援助を受ける受け身の在り方から、その社会の市民となり、市民権を持ち、犠牲を払っても市民的責任を果たさねばならない問題が必ず起こってくる。その場合、受け入れる側となった国（ここではアメリカ）の反省と謝罪の態度への変化の必要と、責任をもってその国の形成の一員となる市民の在り方への道をきりひらくこと

との両方が課題である。そうした21世紀の未来的課題につながる問題が、ここには、はからずも示唆されているように思える。アメリカは必ず変るという湯浅のオプティミスティックともいえるアメリカ観、そして、日系移民に「あなた方は市民権を責任をもって行使出来る筈だ、いや行使すべきだ」という、これまた当時の苦難の状況からはオプティミスティックすぎるような激励は、21世紀の人口移動、難民問題を含む異質の人々の共存の必要性、異質民族（エスニック・グループ）を受け入れて新しいコミュニティとしてのくに造りの必要性は、21世紀へと持ちこされてきている問題である。その理想への展望、予言者的ともいえる課題を湯浅は、日系移民の強制収容所において、直截に語っていたように私には思えるのである。

〔付記〕

湯浅八郎が同志社大学総長として受難した同志社事件の頃も尊敬をもって彼を支持しつづけた日本生れの宣教師の娘、C・B・デフォレスト神戸女学院院長（Dr. C. B. De Forest、宣教師として著名な John K. H. De Forest の次女）は湯浅の親しい友人であった。彼女はすぐれた教育者であり、誰からも尊敬された院長、私の尊敬する恩師である。戦争のため、ほかの宣教師と同様、母国アメリカに帰っていたデフォレスト院長は、クレアモントのピルグリム・プレイス (Pilgrim Place) で晩年をすごしたが、その前、戦時下の日本からアメリカへの帰国を余儀なくされていたある時期、ボストン郊外のアーバンデールのミッショナリーハウスに住んでおられた。私は、交換船で帰国する前にアーバンデールに恩師を訪ね、松林を語りあいながら散歩し、共に祈りをささげ、お別れしたのであった。

このデフォレストがカリフォルニア州マンザナの収容所に1944年 6 月22日より1945年12月20日までカウンセラー補 (junior counselor) として、つまり、専門の相談員の資格は持たないが、日本語のわかる相談員の募集に応募し、 1 年 6 ヶ月間、献身的に働いた。その記録は最近刊行された竹中正夫『C.B.デフォレストの生涯』（創元社、2003年 4 月20日）にくわしく紹介されている。そこにも詳述されているが、マンザナ収容所での彼女の体験した収容所での活動と生活を概観しておきたい。マンザナとはスペイン語で林檎園を意味するが、ネバダ州に近く準砂漠地帯、北米最高峰といわれるホイットニー山を望み、東には死の谷という低地があり、高温で絶えず強風が吹き、砂の嵐がおそったという。デフォレストはハーフ・タイムの仕事の予定が、フルタイムのカウンセラーの仕事に近く、毎日、入居者たちの相談にのったとのことである。マンザナ収容所の社会福祉部の責任者は、以前に日本 YWCA で働いていた M. L.マシウ（Margaret Matthew、結婚後ディルズ M. Dills）

で日本語もよく出来る社会事業の専門家だったという。デフォレストが着任したときは収容所の生活は 3 年目に入っており、人々は収容所の生活にもなじみ、中には、庭園作りをする人、ロック・ガーデンを作る人もあり、散歩する人びとを楽しませていたという。しかし、以前には不満が爆発して抗議集会が開かれ、軍事警察（MP）の発砲で死傷者が出たこともあったとのことである。また、母親が死んだ 7 ヶ月の赤ん坊から17才の少女まで46人の孤児がおり、収容所内に孤児院がつくられていた。あたたかく守られ、クリスマスなどにはプレゼントをもらい、劇をして楽しんだという。終戦も近づき、いざ社会復帰となると、財産も帰る家もない人もあり、彼らの再転住への助力は大変な苦労を要した。マンザナの場合、はじめ収容されたのは 1 万 1 千人であったが、その間、他の職業につく人もあり、1945年 2 月には約 5 千 5 百人が残っていた。それが何とかゆき先きが見つかり、ゼロになったのは1945年11月21日だったと記録されている。これは、 1 つの収容所のケースであるが、他の収容所の場合をも推察させるものである。デフォレストはこれらの人々を支え、なぐさめ、助け、すべての始末をつけて、任期を終えたのは1945年12月20日だったとのことである。元宣教師で神戸女学院院長の強制収容所における日本人移民のための貴重な献身的奉仕の記録である。

2．世界平和と民主主義 ── 国際基督教大学のヴィジョン ──

〔1〕 敗戦国日本の教育改革

ここで、視点を少し広げて、戦後日本の教育改革のたどった道すじを概観しておきたい。

先ず、1946年 3 月、米国教育使節団が占領軍総司令部 (GHQ) の要請により来日したが、その報告書（同年 3 月31日）において、彼らは、日本の高等教育が専門化に偏りすぎることを指摘、人間社会全体を把握するよう広い教養を培うための「一般教育」(General Education) を正規のカリキュラムの中に統合して組み入れることを提言した。文部省はこの助言に従い、大学制度としては帝国大学を廃止し、新たに制定した新制大学において、カリキュラムに「一般教育」を組み入れることを決定した。

その背景には、国家神道を超国家主義、国体明徴思想との関係で特別扱いした「宗教団体法」が廃止され（1945年12月28日）、天皇が自らの神格を公に否定した「人間宣言」（1946年 1 月 1 日）、新しい「日本国憲法」の公布（1946年11

月 3 日）があった。また、アメリカの教育使節団に呼応して、日本側には教育刷新委員会（安倍能成委員長、南原繁副委員長）が1946年 8 月に設置され、この委員会のもとに設立された第一特別委員会が長い討議を経て教育勅語に代わって国民教育の理念と理想を示すものとして、国会が採択する「教育基本法」を公布するに至った（1947年 3 月31日）。

こうした民主化改革の中での教育改革に関連して二つのことを特に記しておきたい。一つのことは、敗戦直後、しばらくの期間、以前の文部省とはちがって、文部大臣に割合、リベラルな民間の民主的学者が就任した時期があったことである。

前田多門、安倍能成、田中耕太郎、高橋誠一郎、森戸辰男らである。アメリカ教育使節団が来日した時、文部大臣だった安倍能成は、1946年 3 月 8 日、この使節団を迎えるにあたり、敗戦国の文教の府を代表する者として、なかなか気骨のある挨拶をしていることが興味深い。彼は言う。敗戦国民であることは苦しい試練だが、よい戦勝国であることも困難である。われわれは卑屈にならないで、戦争中の日本の極端な国家主義、民族主義を批判し、改宗者の心持をもって悔い改め、教育の民主化に努めたいと思う。しかし、同時に、アメリカも戦勝国として無用に驕傲（きょうごう）（おごりたかぶる）にならないでもらいたい。アメリカ的なものを敗戦国民に一方的に押しつけないでほしい。われわれは、教育改革にあたっては、普遍的、世界的教養という理念を基盤とする民主主義教育へと根本的方向転換を遂げようとしている。そして、日本の教育が民主的に改革されることを通して、日本文化の独自性を保持しつつ開花することを希望するものだと述べている。私は特別に安倍能成を代表的リベラルな思想家と考えているわけではないが、これは、敗戦国の文相として勝者アメリカの教育使節団に対する堂々たる挨拶として注目に値すると思う。

もう一つは、アメリカの教育使節団が提案した「一般教育」をカリキュラムに入れるという問題と意味についてである。アメリカにおいても、1920年代から科学教育、技術教育を強調しすぎた教育への反省の歴史があった。その一つ

の顕著な例は、ロバート・ハチンズ (Robert M. Hutchins, 1899-1977) が、1929年、30才の若さでシカゴ大学の学長に選ばれ、人類の偉大な精神的遺産からその偉大な精神の力を学ぶことを基礎とした「リベラル・エデュケーション」への大改革を断行したことは有名である。

もう一つ、1945年頃、ベスト・セラーとなってアメリカの教育界に大きなインパクトを与えるものとなったハーバード大学の「コナント・リポート」がある。ハーバード大学学長のジェームズ・コナント (James B. Conant) の任命した委員会が作成した『自由社会における一般教育』と題する報告書である。ここでは、「一般教育」 (general education) をリベラル・エデュケーション (liberal education) と殆ど同義的につかっている。コナントは、この本の序文の中で「一般教育の神髄(ハート)は、リベラルでフューメインな伝統の連続だ」といっている。そしてこれが、ハーバード大学に 4 年間学ぶ少数のエリート的学生を対象とするのであれば、「リベラル・エデュケーション」と表現したであろう。しかし、このリポートはもっと広く、世代を超えて、大多数の人々に自由社会の市民であるための十分な基礎を与える教育、普遍的(ユニヴァーサル)な教育を意味するものとして「一般教育」と表現することにしたといっている。そこには、国境や文化の相違をこえてユニヴァーサルな、世界的、普遍的ひろがりを持つ自由社会の形成を目指し、そのために働く構成員（市民）の育成を課題とする教育理念であることが明らかに読みとれる。

コナント・リポートは「一般教育」に主として次の五つのアプローチがあるといっている。

(1) 学問領域をこえた学習方式 (distribution requirement)

(2) 包容的理解力育成コース (comprehensive survey courses)

(3) 機能的コース (functional courses)

(4) 古典的名著のカリキュラム (the great books curriculum)

(5) 個人的指導 (individual guidance)

「コナント・リポート」にみられるような意味でのリベラルな教養の育成を目指す「一般教育」が、アメリカ教育使節団の報告書の強調する「一般教育」であったことは明らかである（コナント・リポートが彼らの来日前の必読書の一つであったことは推察できる）。しかし、当時の日本には「一般教育」という用語もなかった（文部省の「文部時報」では「普通教育」と訳されている）。占領下の教育改革において、その意味が充分に理解されずに「一般教育」が新制大学のカリキュラムに組み入れられることが決定されていったように思える。そして、戦後日本の数十年間を通して、大多数の大学において、「一般教育」の意味は遂に正当に理解されることなく、浅く広くのつまらない初等教育的プログラムと教師にも学生にも軽視されてきた。そして、最近はこれを廃止して、専門化、技術教育への推進がはじまっている観がある。

アメリカ占領軍の助言とは関係なく、教養主義の四年制教育を尊重し、継続し、夫々に独自の成果をあげているのは、東京大学の教養学部と国際基督教大学のみである。

〔2〕 国際基督教大学（ICU）初代学長となった湯浅八郎

話を湯浅八郎に戻そう。第二次世界大戦終結後、1946年10月、湯浅八郎博士はアメリカより帰国した。それは、連合国軍による占領下の日本であった。ことに、戦後日本では民主化をめぐって米ソが烈しく対立していた。アメリカ的自由主義によるデモクラシーか、ソ連の社会主義的平等を重視するデモクラシーかの対立であった。

この時、湯浅先生の私へのお土産は、アメリカ出発直前にシアトルで買い求めて下さったという、私の恩師、ラインホールド・ニーバーの新著『光の子と闇の子』(The Children of Light and the Children of Darkness－A Vindication of Democracy and a Critique of its Traditional Defense, 1946) であった。これは、まさに、当時の日本の思想状況に問題を提起するものだと私は思った（私の拙訳が出版されたのは、1948年、新教出版社からである）。

湯浅八郎は、翌年 4 月からは、同志社第12代総長に招かれていた。それと共に、ユネスコ活動の開始をはじめ、平和運動のための諸々の抱負をもって、敗戦国日本の再建に奉仕したいと考えていた。

日本では、15年戦争期を通して、軍閥・右翼勢力による軍国主義、超国家主義の専制的支配に苦しんできた国民は、自由と平和、民主主義を待望していた。そのような中で国際基督教大学創設の案が浮上してきたのである。しかし、この新しい大学創設の考えは、決してアメリカから持たらされたものではない。1910年にエディンバラで開催された第 1 回世界宣教会議 (World Missionary Conference at Edinburgh, Scotland) において日本のキリスト教会の代表は新しい高度のキリスト教大学創立の希望を表明しており、討議の上、支持決議がされている。 2 つの世界戦争によって中断されたが、この夢は日本のキリスト教界に抱きつづけられて来たねがいであった（この点については、拙著『未来をきり拓く大学－国際基督教大学五十年の軌跡』＜2000年 6 月15日刊＞に詳述した)。

第二次大戦後、この夢の実現のために立ち上がった人々があった。山本忠興（早稲田大学教授)、斉藤惣一（日本YMCA総主事)、石原謙（東京女子大学学長)、矢野貫城（明治学院長)、石館守三（東京大学教授）らを中心として設立準備委員会が形成され、活動を始めていた。偶々1945年10月、連合国の占領軍軍属以外の民間人として、始めて日本を訪れた「北米キリスト教界代表団」(Dr. Douglas Horton, Bishop James C. Baker, Dr. Walter Van Kirk, Dr. Luman J. Shafer) に、日本キリスト教界からの新しい大学創設への内発的要望が伝えられた。日本のキリスト者たちのこの夢についての報告を受けた北米キリスト教協議会 (National Council of Christian Churches) は積極的な賛同の反響を示した。さらに、広島・長崎への原爆投下に対するおわびと和解を求めることの大切さを訴えたヴァージニア州リッチモンドのマクリーン牧師 (John A. MacLean) らの運動も合流して、新しい大学創設を目ざす活動となって行ったのである。このようにして、アメリカのメソジスト教会宣教本部幹事ラルフ・ディッフェンドルファー (Dr. Ralph E. Diffendorfer) を主導者として、アメリカに ICU 創設委員会が1946年

3 月に設立された。以上のような経過をふまえて、戦後、日本と北米キリスト者の共同事業として、「和解」と「世界平和」と「民主主義」への貢献を目ざし、その目的のために働く青年を育成しようとするヴィジョンと構想に立つ大学として、ICU が創設されて行ったわけである。湯浅八郎が中心となってこの事業が始められたわけではない。

しかし、湯浅八郎と ICU との関係を考える時、第一に、日本の大学設立委員会は、既に1946年10月にアメリカから帰国していた湯浅八郎に、同年12月23日の会合（於明治学院）において、湯浅博士をこの新しい大学の学長に招きたいという意向を満場一致で決定し、表明している。ところが、湯浅は同志社大学総長（第12代）に1947年 4 月より就任を求められており、それが決っていたので彼は断っている。このことは、日本の準備委員会に湯浅八郎を初代学長に迎えたいという希望が強かったことを示す事実である。

他方、この大学の創設に関心を持つ日本の学者たちによる準備活動として、1948年 1 月31日には、国際基督教大学研究所（早稲田大学教授で電気工学者として著名な学者、山本忠興所長）の開所式が行われていた。そういうことから、これに参画していた主たる学者の中から学長を出したいと考えていた人たちもあったようである。

ところが、1949年 6 月13日－16日の期間に御殿場会議が開催され、新しい大学の根本方針が討議されることとなった。日本側からは、準備委員の人たち、および、日本のキリスト教諸大学の学長たちが、アメリカからは、ディッフェンドルファー財団会長、トロイヤ教授らが出席した。そして、この 4 日間の会議において、湯浅八郎同志社総長が初代学長に、そしてトロイア教授が学務副学長に、ハケット氏が財務副学長に選出された。しかし、上述の研究所関係の人々の中にはこの決定に不満もあったようである。しかも、同年 7 月にはその研究所を解散するという通知が一方的に（恐らく建設準備会より）発送された。これが研究所関係者を怒らせることとなった。建設準備委員会も同年 7 月30日には解散している。御殿場会議によって選出された人々が大学創設にむかって

動き易いようにという配慮があったのではないかと推察される。

御殿場会議で理事長に選ばれた東ヶ崎潔ジャパン・タイムズ社長は同志社にまで出かけ、同大学理事会に湯浅総長の ICU への割愛を要請した。同理事会はためらったが、東ヶ崎らの熱心な説得の結果、1950年頃から非常勤の形で湯浅が ICU の創設作業を手伝うことを遂に了承したのである。従って、1950年頃から湯浅は ICU のために働き始めている。

第一に、大学の構想について考えてみよう。時はさかのぼるのであるが、1946年 8 月 1 日、やがて ICU という形をとることとなる新しい大学形成のためにアメリカ側ではその貢献を志す諸教派のミッション・ボードによって設立された、ニューヨークの事務局（ICUファウンデーションの前身）の責任者 T.T. ブランボー（Thoborn T. Branbough、メソジスト教会の元在日宣教師）と L.オールブライト（Lelond Allbright、カナダ・キリスト教団の元在日宣教師）の 2 人が、日米戦争の間、滞米していた湯浅八郎元同志社総長に意見を求めた。湯浅は、敗戦後の日本において創設されるべき新しい大学について13項目にわたる構想を慎重に用意して、この 2 人に会った。この時、湯浅が用意して持参した構想が、はからずも、その後、日米双方において大学創設に意欲を持つ人々の構想の基礎となったと考えられる。すべてが具体化されたわけではないが、重要な洞察と展望を含んだ大学案であるから、それらの主たる点をここに記録しておきたいと思う。

1．すべての面において第一級の教育機関でなければならない。学術研究のための諸分野、学問的水準、威信において、帝国大学に匹敵する大学であること。
2．学術研究の遂行に必要な設備と基金が十分に用意されるべきこと。
3．新しい事業であること。既存の学校を助ける必要から生じた折衷物であってはならない。……国際的で、(b) 異人種、(c) 異文化が交流する、(d) 男女共学の大学であること。アメリカ人は新しい考えを提案し、強く助言することは出来るが、アメリカ式の学校を押しつけてはならない。講義、図

書館、教員や学生の交換などの計画には帝国大学をも含むべきである。……

7．アメリカ人と同様、韓国人、中国人、インド人、ロシア人、ヨーロッパ人等の間で広く教員や学生を交換し合うこと……優れた学者を客員教授に迎える。

8．他のキリスト教学校との連携が計画されるなら、教員の過重労働にならぬよう、給与を増額し、時間の短縮を配慮して履修単位の交換を行う。他校の廃校や合併を伴うことなく、専門分野の分業化を通じて、調整を追及する。

9．公開講座、成人教育、世界教会主義（エキュメニズム）、世界平和と国際連合、宣教師と外国人のための日本文化等に関する教育講座

13．大学所在地は、必ずしも東京や京都でなくてもよい。日本文化を示す山々を背景として富士山麓に近く、世界にむかって太平洋を見晴らせる場所が好適地である。

日米共にこの考え方に深く同感をもったようである。

はじめ創設者たちは、大学院大学をと考えていたが、当時、日本の文部省は学部のない大学院は認めなかったため、リベラル・アーツの学際的な教養学部の形成から開始することとなったのである。この点については、拙著『未来をきり拓く大学－ICU五十年の軌跡』（2000年）に詳述したのでここではこの問題に入ることはさしひかえるが、今まで日本になかったリベラル・アーツの学際的教養学部大学として発足したことが、日本社会のみならず、国際社会において活躍する有為な人材を輩出させ、日本における独自性をもつ大学としてその存在意義を示す結果となったことは幸であった。

第二に、キャンパス（校地）についてであるが、日本を象徴して富士山の見える所、国際性を意味して太平洋の見渡せる土地などと湯浅は夢をもっていたようであるが、沼津や関西など多くの候補地が推薦された。しかし、結果的に武蔵野の自然を豊かに持つ美しい土地が与えられたことは幸であった。富士山

も見える台地であった。この土地の購入は、準備委員会の熱意ある説得の結果、当時日本銀行の法王（ポープ）といわれた一万田尚登氏が後援会長を引き受けて下さり、全国的に経済界を動員して募金活動を進めて下さったことによる。この大学の創設は日本が国際社会に復帰する上に有意義との訴えにこたえ、1950年 7 月には、あの経済的に困難な時代に、1 億5000万円の目標を突破し、1951年夏には 1 億6000万円に達した。しかも、その95％は非キリスト者の人々からであった。小学生や中学生が飴玉をがまんして10円、20円と寄附してくださったということも、よく語りつがれるエピソードである。この募金の大部分を投じて東京郊外の現キャンパス用地（46万4000坪、即ち、379エーカー）を購入したのである（募金の大部分を土地購入にあてたことが賢明であったことは年を経る毎に明確になって行った）。こうした日本における募金活動の成功は、朝鮮戦争勃発前のいわば、占領第一期に達成されたのであり、日本の民主化、世界への門戸開放に占領軍においても日本人一般にあっても、理想主義的な気運が高揚していた時期だったことと無関係ではない。朝鮮戦争の勃発（1950年 6 月）後、占領政策は第二期に入り、反共的、保守的となり、公職追放解除が行われていった。アメリカにおいては、東アジア諸国の共産主義化を警戒する傾向が強まってゆき、日本の民主化を支援しようという気運もアメリカの一般国民の間にうすれゆく中で開始された募金運動が失敗に終わったことと非常に対照的である。こうした挫折が募金を引受けたタンブリング・ブラウン社長（熱心な長老派教会の信徒）が心臓発作によって急死し（1950年 7 月）、また、そのあと、責任をとることを表明した JICUF のディッフェンドルファー会長の急死（1951年 1 月31日）となったのであった。このあとは、J.C.スミス博士（Dr. John C. Smith）が中心となってキリスト教諸教会、その他、外国宣教部、ハーパー・シブレー夫人（Mrs. Harper Sibley）を委員長に、財団幹事ルース・ミラー（Ms. Ruth Miller）らの女性企画委員会等を中心とする地道な募金運動の努力と献金によって、神と人とに使える人々を育てるための大学建設への夢は微動することなく続けられたのである。

こうした危急の状況にあって、湯浅八郎・清子夫妻はアメリカ財団の要請に応じて、アメリカにかけつけ、全米にわたって、ICU という新しい大学の形成が日米関係の和解と協力のシンボル的働きをする重要性、そして、敗戦国日本の民主化と人類平和に貢献する青年の育成がいかに必要であるかを訴えてまわったのである。湯浅は、学長の責任を引き受ける以上、最善の努力を惜しまない人物であった。また、彼の熱い訴えは、多くの人の胸をうち、共鳴を得たのである。アメリカ全土に ICU という新しい大学の創設が知られることになった一要因ともなった。

ディッフェンドルファー会長の死についてであるが、財団理事会において、タンブリン・ブラウン社を非難することもなく、言訳もせず、「ICU のための募金は、神の御名において達成されなければならない」と強く語り、会長を辞して会長の後任にはアジアのキリスト者史専門家で著名なイエール大学教授ラトゥーレット博士（Dr. Kenneth Latourette）を迎え、自らは募金に専念することを決意したディッフェンドルファー、彼が湯浅と共に事務所のあるビルのエレベーターに乗ったが、その中で、突如、書類カバンを落とし、湯浅のそばにくずれるように倒れたという。これが彼の最期であった。湯浅学長は、「その全人生が博士のメッセージでした」と、その時の衝撃と ICU の使命に貢献しつくしてこの世を去った博士の残した感動を幾度も語った。ICU に建てられた学生会館を「ディッフェンドルファー記念館」と命名したが、これは、ICU の形成の背景にあったこのような献身をいつまでも記念し、記憶するためであった。

その後、各教派は、約束通り熱心な努力をもって募金をつづけ、集まるとそれを ICU に順次送ってよこしてくれた。このような献身的協力は日米関係の「光」ともよぶべき側面を示すものであった。こうして大変な苦心をもって集めて送られて来るお金を湯浅は「献血」のようなお金だといった。ICU のために献金をしてくれている人々は決してお金のあり余ったお金持ではない。上衣が二枚あればその一枚を—というように、自分の生活をきりつめても ICU のためにと送って下さっているのだということをよく知り、また語った。

それでも、終戦後のあの貧しい日本にあってアメリカから経済的援助を受けているというだけで「植民地大学」という眼でみる人が世間にも、キリスト教界にもあった。湯浅学長や日高第四郎先生から招かれて ICU に勤めることとなった時、「なぜ、あのような植民地大学にゆくのか」とキリスト教会の先生二、三から叱られたことは前にも書いた。「植民地大学にするか、日本に根をおろす日本の大学にするかは、中で働く私共の責任です」と答えたのであるが、アメリカから財政的支援を受けていることは、私にとって負い目を感じさせ、心にひっかかるものがあった。ところが、その気持を吐露すると、湯浅学長は、「神様のこの新しい事業をやり遂げるために、アメリカ人は彼らの出来ることで責任を果そうとしているのだ。何も遠慮したり、ひけめを感じることはない。貧しくともここで一生懸命に働いている吾々もここでなしうる最善をつくして、この共同事業への責任を果たしつつあるのだ。これは、国境を越えて夫々に出来ることに力を注いでゆく協力事業なんだ」と平然として語った。これは、私にとって、まったく新しい発想であり、印象に深く刻みこまれた。

現在、私共日本国民は、多少富める国となって、世界の貧しい国、難民、戦災の国などに支援を送っている。その責任の果し方、考え方に深くつながる教訓が、ここには含まれていることを痛感する。人類共存への共同事業にささげる責任を果すという謙虚な気持を忘れてはならないと思う。

また、敗戦直後の貧しい日本にあって、生活程度の異る西洋（アメリカ、ヨーロッパ）から来た教師と日本人教師とのサラリーの差も常にキャンパス・ライフにおける問題であった。アメリカの大学で MA の学位をとったばかりの若い女性の英語教師のサラリーの方が日本の高名な大学者のサラリーよりも高いというようなことは、日本人の間に常に不満の種子の一例としてささやかれた。それらがすべて学長の責任のようにも語られていた。

また、終戦直後の日本において、西洋人教授の家庭は女中を雇うことは容易であった。初期の学生たちは、大学から奨学金も相当に出たが、同時に、図書館の本の整理、トイレをも含む校舎の掃除、アメリカ人教師の家事手伝、食堂

の皿洗いなどに、今から考えると驚くほどに安い賃金でアルバイトをして生活を支えていた。それを卑屈に感じさせないような配慮をもって、キリスト教信者のある職員は、彼らをキャンパス内の狭い自宅に招いて聖書研究、讃美歌を共に歌い、軽食を呈供するなどして大学形成を助けて下さっていたこともあった。

湯浅学長宅は、ICU の様子を見に訪れる内外の協力者たちの来客の接待が大変だった。近くにレストランもない時代のこと、物資の少い中で湯浅清子夫人は食事の準備などに忙殺されておられたことを、共に招かれる事の多かった私はよく知っている。

第三に、話は前後するが、リベラル・アーツの教養学部設立には教授陣が慎重に用意されねばならない。教授陣の充実についてであるが、リベラル・アーツの教養学部大学の形成から開始することとなった時、プログラム（カリキュラム）の立て方、その人集めが大事業であった。ICU の創設に深い関心を持ったアメリカ、シラキウス大学のトリー学長（Chancellor William P. Tolley）の推薦によって、シラキウス大学の教育学者トロイア教授（Dr. Maurice E. Troyer）が ICU にかかわることとなり、学務副学長に選出されたのであった。トロイアは、上記御殿場会議に出席するために日本に来るにあたって、上述した『米国教育使節団報告書』（“The Report of the United States Education Mission to Japan” 1946年3 月31日提出）を精読するなど、日本の教育の背景、事情を学び、大学教育が高度に専門化し、狭い分野では学部学生はアメリカの修士号を得た学生より進んでいる場合があるが、「一般教育」（General Education）、リベラル・アーツの教養が欠けていることなどを学んで来ていた。また、来日以来、山本忠興教授を委員長とする日本の学者たちとも熱心に語りあっている。こうした慎重な準備作業をふまえて、一般教育を基礎にしたリベラル・エデュケーションの大学形成の構想を慎重に用意して御殿場会議に提案したのである。そして、同会議によって了承されたのである。

そこで、リベラル・アーツの教育を中心となって推進する教養学部長の適任

者をはじめ、よき教授陣を見出さねばならないということで、トロイア学務副学長はアメリカにかえり、教育学界に広く人材を探してまわった。多くの専門家の助言を得た結果、インディアナのゴーション・カレジ（Goshen College）の教授、カール・クライダー博士（Dr. Carl Kreider）を多くの学者が推薦したので、先ず、トロイア教授夫妻がクライダー家を訪ね、彼が最も適した候補者と考えるに至った。クライダー夫妻が思案しているところへ湯浅八郎学長が清子夫人を伴って訪ねている。トロイヤも湯浅も夫々に夫人を伴って訪ね、面接していることは重要である。湯浅夫妻はクライダー夫妻と親しく語りあっただけでなく、その日はクライダー家に泊めてもらっていることは興味深い。そして、翌朝には、長男アランと娘のレベッカがさっそく「オハヨウ」の日本語を湯浅夫妻から学んだということである。湯浅学長夫妻のこの訪問は、クライダーをICU教養学部長候補として評価する最後の決定要因となった。ファカルティの人選にあたって、夫人を伴って面接していること、相手だけでなく、夫人、子どもたちをも含めた「家族」の人格的資質と生活の全体像をも重視して観察、評価していることは非常に重要である。「ICU ファミリー」をかかげ、家族のようなキャンパス・コミュニティ形成が湯浅学長のねがいであった。これは、ある卒業生からきいた話であるが、チャペルが終って外に出てみると雨が降っていた。傘を持たない 1 人の日本人教師が雨に濡れて歩いていた。クライダー婦人が息子のアランの肩をポンと叩いた。すると、アランがさっとかけて行って日本人教師を自分の傘に入れて一緒に歩いて行ったという。また、ある日の午後、アメリカ人教師の息子たちがテニス・コートでテニスを始めようとしていた。それを見た幼い少女のレベッカが「ここは学生たちのためのテニス・コートでしょ。私たちは学生の使わない時に使うべきじゃないかしら」と言った。すると、その少年たちは年下の少女でも、その言い分に説得力があったので、納得して、「今はやめておこう」と帰って行ったという。これらのエピソードにはクライダー夫妻の家庭教育がゆかしくしのばれるのである。アランとレベッカはこのようにして、ICU ファミリーとしてのキャンパス共同体の形成にけなげに美しい

協力をしてくれていたのである。そして、それは日本の学生たちにとって胸に残る教訓となって行ったのである。

これは、多くのファカルティや学生たちの大学共同体形成への美しい貢献の一つの例である。

話を湯浅八郎に戻して、研究所の解散で ICU に反感、ないし、不快感を持つ学者たちに彼は、ICU に来て協力して下さるよう懇願してまわっている。篠遠喜人教授を自然科学科長に、神田盾夫教授を人文科学科長に迎え、それぞれに重要な働きをされ、多くのよき人物を育成された。石原謙教授、斎藤勇教授らは教授として、あるいは、客員教授として大きな影響を与えられたのである。非常勤であったが上田辰之助一橋大前教授は、人間を社会科学研究の中心課題とする学者であった。彼の影響も大きかった。ICU 独自の一般教育は、これらの教授、その他の学者、さらに、湯浅学長の熱心な説得、要請に、これを神からの伝道のための "calling" と受けとめてスイスから来たブルンナ（Dr. Emil Brunner）のような大学者の貢献は、その献身的な働きによって果たされた。このように多くの協力者を内外よりえて、日本にかつて存在しなかったリベラル・アーツ・エデュケーションの学際的教育の創設が国際的人材をもって実践されたことが、ICU 独自の教育的成果を生み出したのである。

第四に、学生たちに対してであるが、入学試験を受けに来た受験者たちに、湯浅学長は、「この大学を志願してくれてありがとう！よく試験を受けに来てくれました」とお礼をいってまわったという。卒業生たちの集りで、試験を受けに来て、学長にお礼を言われたことに驚き、感動したと語る人たちがいた。海のものとも山のものともわからない大学を創設しようとする時、この新しい大学の趣旨に賛同して入学試験を受けに来た学生たちに、「ありがとう」といってまわったことは、実に湯浅らしいふるまいだと思われる。そうした、ういういしい新鮮な態度は、最初だけではなくその後も、いつまでも変らなかったように思う。入学式においても、新入生に歓迎の言葉、これからの大学生活の目標、意義を簡潔に語ると共に、二階に坐る学生たちの父母に対して、「一人とあって、

二人とない大切なお子様の教育を私共に託して下さった御両親の信頼と決断に心から感謝します。私共はその御期待に応えうるよう、最善をつくしてはげみます」（湯浅特有の表現）と必ず謝意を述べた。それは、10年間の学長時代も、学長退任後、理事長に就任してからも一貫して変らなかった。

入学式に於ては、一人一人の学生に国際連合の「世界人権宣言」の重要さを説き、「国際基督教大学学生宣誓」（International Christian University Pledge）が行われた。

「国際基督教大学の学生として本学の目的と理想との実現のために世界人権宣言の原則に立ち、法を尊び、学則ならびに指示に従うことを、入学にさいし、ここに厳粛に宣誓します。」

それを誓い、署名して入学が認められるという学則が50余年、一貫して守られてきているが、これを原則とすることを言い出し、それを始めたのは湯浅学長であった。さきにもふれたが、International Christian University の頭文字をとって“ICU”とはじめて呼んだのは湯浅学長である。アブリヴィエーション（頭文字による略称）がまだ一般に通用しない時期に“ICU”と呼ぶのは唐突であり、また、西洋的すぎるという印象をもった人々もあった。湯浅が学長になると、大学名までがバタくさくなるといった人もあった。しかし、湯浅は民芸で有名な益子焼の窯元に依頼して、ICUを英語で“I see you”（私はあなたを見る）、と表現し、つづけて“you know me”（あなたは私を知っている）と書いた陶器の「ICU 湯呑み」茶碗をつくらせ、一時期、大学の売店で売られていたことがある。ここに湯浅のユーモアがあり、また、新しい事業のスローガンを明確にする才能があった。中島飛行機（富士産業KK）所有のすすき野原を購入して建ち始めた ICU はすべてが未完で足りないものずくめであった。しかし、ICU は「明日の大学」（University for Tomorrow）だといい、この理念をヴィジョンとして教授、学生の間に未来を展望し、これから発展させてゆかなければならない開拓的課題を担った「明日の大学」の希望と責任感をわき立たせた。「幻（ヴィジョン）なければ民ほろぶ」といい、「若者に幻（ヴィジョン）を」というのも湯浅がしばしば用いた

言葉であり、その名の『文集』も同窓会によって出版されている。人類平和と愛の共同体としての世界の形成に奉仕するというヴィジョンを持つ若者を育てたいという情熱にもえていた。

彼は、キャンパスでも校舎内でも、学生に出逢うと殆ど必ず、彼の方から声をかけ、名前をきき、話しかけていた。後にすぐれた芸術写真家になったある学生は、「君の名は？」ときかれて「森本二太郎です」というと、「ホー、いい名前だね」といわれた。このことがとても嬉しかった、いつまでもそれを忘れないと森本さんがある会合で語ったことがある。後に国際的にも著名なビジネスマンになった茅野徹郎さんは、キャンパスでよびとめられて話しあった時、「人と話をする時は、伏し眼で話すのではなく、相手の眼をじっと見て、しっかり自分の意見をいうことが大切だよ」といわれた。このことが、その後、日本人であれ、外国人であれ、人への対し方の基本的姿勢を与えてくれたと語った。これらは、ほんの一、二の例であるが、湯浅学長は、キャンパスで出会う学生一人一人を出来るだけよく知り、名前を覚え、人間的コミュニケーションを持とうと努めていた。

学内にいろいろと複雑な批判があるにもかかわらず、彼は、トロイヤ、クライダー、日高第四郎、篠遠喜人、神田盾夫諸教授をはじめとする老若のよき協力者を得て、I（国際性）、C（キリスト教）、U（学際的学問）の統合された大学の基本理念を定着させ、すぐれた卒業生（社会的・国際的に評価をうける）を輩出する高度の質をもつこととなったICUという大学の船出の先頭に立った。そして、その牽引力としての役割を最初の10年間に十分に果したと思う。

彼に対する批判や反感もあることをよく熟知していながら、「私はまちがいを犯しているかもしれない。しかし、神の御旨に従おうとして最善をつくす。あとは神のお裁きにおまかせする」。これが彼の一貫した信念であった。そして、10年間も学長をつづけるのは長すぎるという声が出て来た時、彼はさっぱりと学長職を去って京都の下鴨の家に帰った。しかし退任後も、彼は求められて1964年3月23日より1981年8月15日（永眠）までICUの理事長をつとめた。

1978年 1 月28日、湯浅八郎の米寿を祝う集いが催された時、皆に配った「ご挨拶」の中に、自らの「生活信条」を次のように書いている。

生活信条

生きることは	愛すること
愛することは	理解すること
理解することは	赦すこと
赦すことは	赦されること
赦されることは	救われること

この時、もう一つ「ICU私見」と題する割合長文のメッセージを配っている。その中で、ICU は神の摂理の下にある、神とともにする冒険だと確信すること、人間は本質的に半面神の如く半面悪魔の如き存在であるが、キリスト教に基づく人間観、価値観によって人間育成につとめる永遠の使命があること、「ICUに外人なし」の言葉に示されるように全世界のあらゆる人々に開かれたオープン・ユニヴァーシティーであり、人類と運命を共にする永遠に未完成な「明日の大学」だということを十ヶ条にわたって書いたあと、一つのエピソードを書いている。図書館の前にある一本の松の木の根本にある小さい石碑についてである。湯浅はこれは「私がICUに残した唯一の石碑」だという。1952年の日米平和条約を記念して、当時の責任者秩父宮妃名誉評議員、東ヶ崎潔理事長、鵜沢総明評議員会議長、湯浅八郎総長（学長）と共に、40万坪の校庭の一木一草を愛護した宮沢吉春園丁（ガーデナー）の名が同じ大きさで刻まれている。この石碑をつくる時、どの名前かを省く必要があったなら湯浅の名をまず取ってくれ、最後に残すべきは園丁宮沢吉春氏の名だと語ったと言っている。これはICUの形成につくした人は地位や名声にかかわらず、誠実に献身奉仕した人こそ、学長もその靴の紐を解くにも値しない存在だ、そうした精神をこめて ICU に残した平和を記念する石碑こそ「私が ICU に残した唯一の石碑」だと彼は語って

いるのである。

そして、多数の有為な卒業生が大企業や国際機関や官庁関係で華々しく活躍していることも誇りと思うが、地方で黙々と草の根運動的奉仕に開拓者的に働いている卒業生に深い敬意と感謝をささげている。そして、神とともなる聖なる冒険である「明日の大学」を感謝しようと教員や卒業生に語った。

湯浅八郎の歩みをたどりつつ、考えさせられることは、彼が最も心血を注いだのは、「人類平和」であり、そのために献身的に働く若人を育てることであったと思える。武蔵野の雑木林とすすきの野原に、国際基督教大学という新しい大学の創設をはじめ、その形成に力を注いだ。余りにも未完成な大学を「明日の大学」とよび、敗戦の貧しい日本の青年たちに「幻（ヴィジョン）を持て」、「幻なければ民亡ぶ」とよびかけた湯浅八郎、彼のよびかけは、永遠に鳴り続ける鐘の音のように、今も響きつづけているように思える。

〔付記〕UBCHEAとの関係について

ここで、アジアのキリスト教高等教育との関係を付記しておきたい。ICU には創設以来、香港から中国人留学生が毎年迎えられてきた。1949年、中華人民共和国が建設されて以来、アメリカ、カナダをはじめ、西洋諸国のキリスト教諸教会は宣教師や教育者を送ることができなくなっていた。

これまでキリスト教諸教会、諸団体が支援してきた北京の燕京大学は国立北京大学に、また、南京の金陵女子大学なども南京大学に接収された。このようにしてキリスト教主義の諸大学のキリスト者による運営継続は不可能となった。

そのような状況の中で、以前は The United Board for Christian Colleges in China と称していた組織が、The United Board for Christian Higher Education in Asia (UBCHEA) と改称され、アジア全体のキリスト教高等教育を支援する組織となった。ライシャワ教授が所長を勤めておられた頃、初期には、ICU アジア文化研究所を支援してくださったハーバード大学の Harvard-Yenching Institute はハーバード大学と燕京大学との歴史的関係を今も記念してその名を残し、アジア研究をつづけているのである。ちなみに、日本に関する諸資料は、アメリカで、ハーバード・エンチン・インスティテュートが最もよく集めていることでは定評がある。

ICU は創設当時より UBCHEA と深い関係にあった。それは、湯浅八郎学長と UBCHEA の代表役員 (chief executive) フェン博士（Dr. William P. Fenn , アメリカ人）との親密な友情に基づいている。フェン博士は南京大学の外国語研究科科長として働いていたが、中国革命後、アメリカに帰り、The United Board を通して、38年間、中国、及び、アジアのキリ

スト教高等教育のためにつくした人である。フェン博士と湯浅学長との深い信頼に立つ協力と、彼の熱心な努力によって、ICU 開学以来、毎年、5 名（時には 4 名）の香港在住の中国人学生に奨学金を出して ICU への留学の道がきり開かれてきた。ICU に保存された資料によると1953年より1995年の間に UBCHEA の奨学生の総数は139名にのぼる。彼らは、香港にあったキリスト教学校崇基学院院長 (The President of Chung Chi College) 容啓東博士を委員長とする審査委員会によって厳密に選出された留学生であった（なお、容啓東は中国「洋務運動」で最初にアメリカに留学した容閎の甥であり、父容星橋は孫文が来日し、犬養毅、宮崎滔天らと中国革命について会議したとき、孫文に同行した人物、中国近代化、日中関係に重要な意味を持つ一族である。容啓東が院長をつとめた崇基学院 (Chung Chi College) は、現在は香港中文大学の一部となっている)。

香港からの中国人留学生を開学以来、UBCHEA の支援によって迎えて来たことは、顕著な一つの貢献である。その後、香港中文大学、香港大学、韓国の延世大学、台湾の東海大学、フィリピンのアテネオ･デ･マニラ大学、フィリピン大学、シリマン大学、タイのタマサト大学、ニュージーランドのワイカト大学等との交換学生制度の確立、教授の交流、近代アジアに関する共同研究活動など、アジア諸大学との交わりの諸活動は、湯浅学長のこうした開拓的活動の精神を継承するものである。

（以下次号につづく）

訂　正

武田清子「湯浅八郎と二十世紀（二)」（本誌50号）に以下の誤りがありましたので訂正します。

20頁10行目

［誤］アメリカンボード外国宣教部　　［正］アメリカンボードの外国宣教部長

21頁17行目

［誤］マノティン・ルーサー・キング　　［正］マーティン・ルーサー・キング

Yuasa Hachiro and the 20th Century (3)

<Summary>

Takeda Kiyoko*

I. Light and Shadow in the Japan-U.S. Relationship

(1)

Right after war between Japan and the U.S. broke out in 1941, a study group for peace after the war started in New York. John Foster Dulles (an international lawyer and a son of a pasture of Presbyterian church), who had been an assistant to President Woodrow Wilson, and who had attended the Paris peace treaty conference after WW I, was a member of this group. In this group meeting, he expressed his concern that if the victorious nations made one sided treaties after the present war, they would once again lay the foundation for a future war. This was the mistake that had been made after WW I, and he said that this mistake must not be repeated. In addition, in New York, the mayor and former missionaries began support activities for the Japanese who had lost their jobs. Yuasa felt American good will deeply in those times.

(2)

On the other hand, on the West Coast of the United States, American authorities forced 1,230,313 Japanese immigrants to move into concentration camps. This included immigrants and their children with American citizenship, who made up 70% of the Japanese-American population at the time. All their property was lost, and the Japanese immigrants and their families were forced to stay in poor barracks in hastily erected camps in the desert. These new Americans were disappointed and enraged. Yuasa Hachiro visited those camps and told the people that this was one of the darkest pages in

American history. However, he said that the War would come to an end eventually, and that since they were American citizens, they had the right and responsibility to contribute to make the country a really democratic and good country, and that by doing this America would change for the better. Some Japanese were angry with him for saying this.

After the War, there were remarkable activities done by Japanese-Americans in academic, educational, social and political fields. They could be proud of their upright Japanese-American identity. Eventually, their movement for redress moved the U.S. Congress, and in April 1988 the U.S. Government expressed an official apology, and the 60,000 survivors of the camps were given compensation of $20,000 each.

Yuasa's words to the immigrants seem to contain some important messages for our times as well. Now in the present world vast numbers of refugees and immigrants have been uprooted from their home countries due to political and racial struggles in Africa, the Middle East and other parts of the world. They are challenged to take root in foreign countries and to become responsible citizens there.

II. World Peace and Democracy: The Vision of International Christian University

After the defeat in WW II, ultra-nationalism and militarism were removed from Japan by the United Nations' army of occupation. In addition, the Emperor promulgated a "negation of his divinity," and the constitution was changed into a democratic constitution. In October 1946, upon his return from the U. S., Yuasa took office as President of Doshisha University. For those young and middle aged people who had been brought up in the liberal atmosphere of the Taisho Democracy Era (1910-23), democratic reform after the War was not something that they were forced to accept by an occupying army, but rather it was a "liberation" from "the dark valley" of the early Showa Era.

In addition, after two World Wars, it seemed that the time had finally come to realize the long awaited dream of founding a Christian university with high academic standards.

International Christian University (ICU) was founded through the collaboration of a preparatory committee of representative Japanese academics with North American Christian churches. These churches with a spirit of reconciliation (for Hiroshima and Nagasaki) were able to respond resonantly to the strong desires of the Japanese committee. In the course of events, it was in June 1949, at the Gotemba conference, held jointly by both the Japanese and the U.S. sides, that the foundation of ICU was decided upon and that Yuasa Hachiro was elected the first president (For details, please refer to my book, *Higher Education for Tomorrow: ICU and Postwar Japan*).

President Yuasa started to create the university as a Liberal Arts College with the cooperation of excellent scholars from Japan, the U.S., Europe, and etc. Such phrases as, "Be a person who serves both God and the people", "Pledge to uphold the Universal Declaration of Human Rights", "Provide vision to youth", ICU as "the University for Tomorrow", and the concept of "the ICU Family" capture the guiding visions of the university's formation period. These are all visions that President Yuasa articulated and helped to make manifest.

He called on the professors and students from different educational ideas and cultures with different languages and histories who gathered there to achieve these visions and led them in the formation of the university. This process could be compared to the Biblical process of making one's way through the wilderness. The university was not without its frictions, conflicts, dissatisfactions and problems. Some members were against Yuasa. However, Yuasa presented himself as a simple and optimistic man, who would often say, "I do my best, but judgment is left to God." In any case, Yuasa seems to have been the suitable man to serve as the central figure in the adventurous beginnings of this new university.

*Although this journal usually lists family names last in articles written in English, in this case, at the author's request, we have followed Japanese name order.